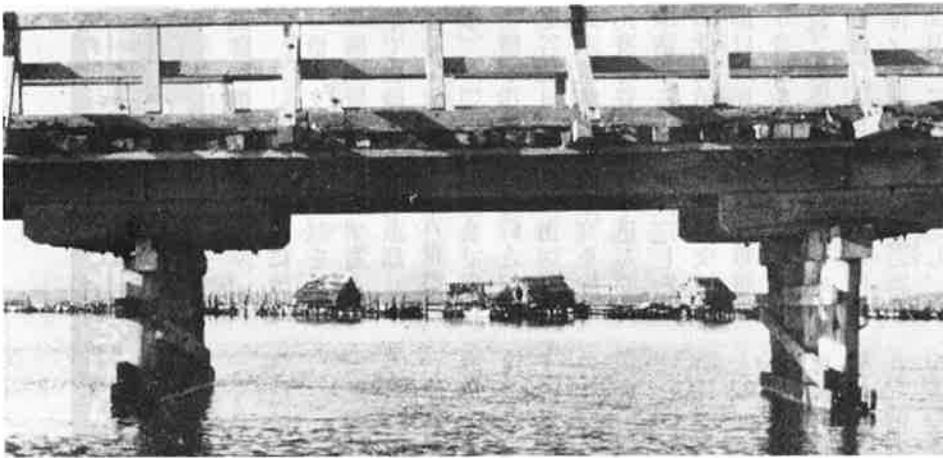


青森県最大の湖、小川原湖は淡水と海水が混じり合う汽水湖で、両方の魚類が見られる。小川原湖漁業協同組合HPによると、ワカ

サギやシラウオの漁獲量は全国最大を誇る。では、江戸時代における漁業はどうだったかを紹介したい。ちなみに小川原湖は1958



小川原湖の湖口にあった旧高瀬橋（現在は廃橋）から臨むマテ小屋  
（『小川原湖博物館案内』1963年より転載）

（昭和33）年までは小川原沼（こがわらぬま）と呼ばれた。江戸期は倉内沼ともいった。当地は寒冷地で土地も痩せているため農業のみに依存するところが出来ず、小川原湖周辺の人は、湖や高瀬川

（同湖から太平洋に注ぐ川）などでの漁で生計を維持してきた。江戸前期にさかのぼる記録はないが、江戸後期、寛政年間（1789〜1800）の「邦内郷村志」という地誌には「沼中には毎年ニシンが来る。その漁が最も多い。カレイ、ハマグリの漁を生業としている者も多い」とある。

ニシンは同じ小川原湖

湖に生えているコウホネ

## 宝の湖 小川原湖

〜飢饉時に命を救う〜

中野渡 一耕

（県民生活文化課 県史編さんグループ主幹）

湖沼群に位置する尾駮沼（おぼろ）（六ヶ所村）の特産物だが、小川原湖でも獲れていたことがわかる。現在の特産物であるシジミが見えないが、およそ40年後の「市川日記」（天保飢饉を記録した日記として著名）では、「沼貝（カラスガイ）や雀貝（シジミカイ）が沼の北部に多い」と記す。

内村（現六ヶ所村）の湖口に小屋が1列に並んでいる様子が描かれている。

「市川日記」に出てくる小屋がけの漁労場をマテ小屋という。尾駮沼のマテ小屋については「邦内郷村志」と同時期に菅江真澄も記録しているが、小川原湖については1850（嘉永3）年の松浦武四郎（蝦夷地探検家として有名）による「東奥沿海日誌」に、倉

1848（弘化4）年には、マテ小屋はおよそ25・6軒もあり、漁師は、「夏場には銭100文で、5・6寸から1尺（約30cm）くらいのヒラメを40枚ずつ売る。価格が安いので自由している」と記録している。その漁獲物を七戸や五戸地方の町方ないし村方に売りさばくことで生活を成り立たせていた。

「沼貝（カラスガイ）や雀貝（シジミカイ）が沼の北部に多い」と記す。

当時の小川原湖の特産として、「ヤツメウナギ、ヒラメ、フナ」のほか、量は少ないが「コイ、ウナギ、イナ（ボラのこと）」を挙げている。ワカサギやシジミ魚が増加したのは明治後期以降のことである（『小川原湖と漁協のあゆみ』）。マテ小屋による漁労は今では過去のものになったが、小川原湖の湖口付近にはマテ小屋が復元され、往事を偲ばせている。

1838（天保9）年の

倉